

第9回 「死」について (2026.08.29 開催)

<概要をまとめる意義>

以下、今回の哲学カフェの内容について概要をまとめる。

これは議事録ではない。迷ったら何度もここに立ち返り、その内容を容赦なく批判し、議論しなおし、更なる”問い”の根源へ一歩でも近づくための手掛かりとしてほしい。

<死について>

全ての生命に約束された出来事である「死」について、私たちはよく考えない。あるいは考えないようにしている。そんなことは神話や宗教に任せておけばよいと思われるかもしれないが、私たちが私たちの言葉で死を語ることは大きな意味があるように思える。そこで今回は、宗教の力を借りずに死そのものを語ることで議論を進めていった。まずは死とは何なのかを考えるために、身体の死と精神(心)の死を分けて考えてみた。例えば、脳死という状態がある。身体の一部の機能が維持されている一方で、脳の機能は不可逆的に失われている。では、眠っているときはどうだろう。これも身体は正常だが、論理的思考や会話といった対人的機能は一時的にしろ、失われた状態である。さらに、胎児はどうか。これも身体的には正常だが、他者との意思疎通はできない。脳死、睡眠、胎児。この3つは全く違う医学的状态だが、身体が存在する一方で、私たちが普段人間らしさだと思っている意識の働きや意思疎通といったものが欠けているという点では共通している。そして、表に現れた状態に対する生死の認知は全く異なることを考えると、私たちが考える生と死の境界線は身体的状態だけによって決まるのではなく、その生命をどうとらえているかという人間側の文脈によっても揺れ動いているのではないだろうか。また、死という言葉はスケールを持つのではないかという考え方も提示された。つまり、全生命の死、人類という種の死、個人の死というように段階的に分かれており、個人の死は人類という種の活動範囲に最初から折りこまれているものであるという意見だ。この、小さなものがより大きなものに包括され、全体として一つの調和を形成するという物語はまさに仏教的な曼荼羅(マンダラ)の世界観を想起させる。ここで、参加者からひとつの疑問が挙がった。「結局どうせ死ぬならば、なぜ生きるのか?」というものだ。答えは人それぞれであり、その議論こそが肝心だと考える。しかしながら、今回「死」を考えることで「生」が改めて問い直されたということはとても意義深いことだと感じた。生と死は相反するようで、実は互いを深く理解するために最初からセットされていたのではないだろうか。科学が進歩し、やがて不死や不死まではいかなくとも驚異的な長寿が一般に普及した時、私たちはそれでもさらに長く生きること执着するのか、それとも逆に安らぎとしての死を望むのか。この人間くさい価値観の議論を抜きにした科学の進歩は、必ずしも幸せを約束するとは限らない。

“死”を読み解くキーワード>

・死の本質 ・死のスケール ・不死 ・死についての刷り込まれたイメージ

これらのキーワードから、新たな”問い“へ変換した。

<新たな問い>

・死は悪いのか? 良いのか? タイミングによるのか?